

芥川龍之介・作 「魔術」より抜粋

さあ、引き給え。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家作《かさく》も、馬も、自動車も、一つ残らず賭けてしまふ。その代り君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引き給え。」

私はこの刹那《せつな》に欲が出ました。テエブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、折角私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向うの全財産を一度に手へ入れることが出来るのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐《かい》があるのでしょうか。そう思うと私は矢《や》も楯《たて》もたまらなくなって、そっと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引き給え。」

「九《く》。」

「王様《キング》。」

私は勝ち誇った声を挙げながら、まっ蒼になった相手の眼の前へ、引き当てた札《ふだ》を出して見せました。すると不思議にもその骨牌《かるた》の王様《キング》が、まるで魂がはいったように、冠《かんむり》をかぶった頭を擡《もた》げて、ひよいと札《ふだ》の外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰りニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨脚《あまあし》までが、急にまたあの大森の竹藪にしぶくような、寂しいざんざ降《ぶ》りの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まる

である骨牌《かるた》の王様《キング》のような微笑を浮かべているミスラ君と、向い合って坐っていたのです。

私が指の間に挟《はさ》んだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっている所を見ても、私
が一月ばかりたったと思ったのは、ほんの二三分の間に見た、夢だったのに違いありません。
けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間だ
ということ、私自身にもミスラ君にも、明かになってしまったのです。私は恥しそうに頭
を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの
修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテーブル掛の上
に肘《ひじ》をついて、静にこう私をたしなめました。

1998年12月8日公開 2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。